光

第五十二輯

大正十五年四月

同人懺悔報恩の奉仕者
祈願不二の光明によれる生活
費用供養されたる浄財

◆認識以前のもの……西田天香
◆心證の一境に參じて……金子白夢
◆臺灣に學ぶ(下)……松下吉衞
◆乞食の歌える……すゞき五ろう
◆武藏野道場の歌(二)……野木典郎
◆隱れたる純情の人々……谷口雅春
◆生死托鉢(下)……住田無相
◆光明へ……八田勝三

一燈園・宣光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明祈願（暫定）

不二の光明は宇宙に遍滿する陽光の如し。物あり、之に觸れて色々の光を發す。光明祈願は即ち起稿者識界の現象に過ぎず。添すべく、削すべく、正さゞる可らず、改作また不可なし。暫定と名づくる所以なり。

不二の光明によりて新生し許されて生きむ。

我等は先づ不二の光明によりて復活新生し、神に委ね佛に養はれ他に障りなき生涯を送らざる可からず。

諸宗の眞髓を禮拜し歸一の大願に參ぜむ。

内外古今諸宗の眞髓を禮拜すれば、歸一の大願は正に左の如くなる可し。

通願　皆俱成就大圓覺

別願　將來世界眞平和

別に一宗を立てず、單に一宗に偏らず、古今聖者の光を仰ぎ德を頌し、その遺されたる事業を成就せんことを期す。

懺悔の爲に奉仕し報恩の爲に行乞せむ。

世間一切の罪惡苦患、何人かその責を脱るゝことを得べき。願くば常に懺悔の心を持して十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞し、以て法界成就の本願に副はんことを。

法爾の淸規に隨ひ世諦を成ぜむ。

天眞法爾の戒相に則り、六度の行願に隨ひ、治生産業に即して眞道を行じ、永久眞平和を將來すべき生活法を實證し、以て在家俗諦を成就せんことを期す。

即ち天華香洞に歸り無相の樂園に逍遙せむ。

達觀すれば實にも此世は寂光の淨土、妙樂の天國、文明の隆興も進化の事象も乃至淸規戒行も、此の見地よりすれば即ち一の遊戲三昧に過ぎず。憾むらくは、個中の消息もとよく言辭の彰し得る限りにあらざるを。暫らく此の實相に名けて天華香洞といふ。天華香洞の門、假りに名けて一燈園となす。道に志して尙自ら立つ能はざるもの、乃至老、病、幼者等の爲めに設けられたる一の化城とも見る可し。その存立は喜捨の淨財に成り、在園はその淸規を守ることによりて許さる。

天華香洞に立ち、信託を受けたる財物事業の整理經營等に從ふを假りに名けて宣光社といふ。宣光社の目的は世間の執迷紛爭葛藤を根絶し、以て齊家治國平天下を期するにあり。

天華香洞と一燈園と宣光社と、三位にして一體、通じては即ち無相不二。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

認識以前のもの

西田天香

一燈園生活は、一體、人間が造つたものか、又は、お光から惠まれたものか、これは、可なりな重大問題であります。この生活が、私に惠まれてから、二十有餘年になります。この間、顧みれば、ずゐぶん、雜多な事にあひ、樣々な經驗をなめさせてもらひました。從つて、世間から受けた批評も、決して單純ではありませんでした。

ある人は、かうした極端な痛罵をあびせてをります。『彼等は下座奉仕の美名にかくれて、便所掃除を事とし、實は變態性慾の滿足を計つてをるのである。』と。これが、無責任な人々によつて釀された浮評ならまだしも、學位もあり名聲も博してゐる堂々たる大學敎授によつて公開の講演會でなされた批評であるとすると、私共のこの生活が、どうしてこんな風に敎授の眼に映つたのか、同人の托鉢ぶり修行の方法について、大いに省みるところがなくてはならぬと思ひます。

次ぎに、一燈園は一種の反動的團體だとするものがあります。さう思はれるふしが、私共にあるとすれば、互に相戒めねばなりません。社會の風潮如何によつて右し左しするやうな腰の浮いたことでは、いたし方がありませんから、かうした批評は、たとへ當らずといつても、他山の石として、輕々しくきゝすてゝはなりますまい。

　更に、「一燈園生活は一時的の感激にすぎない。やゝこしい家庭からのがれて、厄介ばらひをして、輕微な雜用を責任のかゝらない立場で、轉々、して歩いて、托鉢先からは篤くもてなされ、園に歸れば寢床があり、病氣の時にはすぐお醫者さんにかゝれもすれば、二三日托鉢を休んだとて小言一ついはれるでもない。こんな呑氣な生活は、どこへ行つても許されはしない。皆、よい氣持になるのは當り前である。しかし、やがて目がさめて、親を問題とし、妻子をどうしようといふことになれば、幻滅を感じて、この生活は續けられなくなるし、又、續けられては困る。』と、いふやうな、大分、急所にふれた批評も聞いてをります。園生活の現狀を、かうした怠け者の天國のやうに觀られる點が、たとひ少しでもあるとすれば、これは由々しき大事で、大いに畏れつゝしまなければなりませんが、これが、一燈園生活の眞面目である筈はありません。

　私共は、時に召ばれて、資本家のところへまゐり托鉢いたします。すると、社會問題のやかましい時代に、何の暇あつて物持の御用を務めるのか、奴隷道德の鼓吹は、もう澤山だと、非難されます。私共は、又時に、勞働者に伍し貧民窟に投じ乞食と生活を共にすることがあります。もとより、これ奇を衒ふためでもなく、自己欺瞞の座興でもなく、まことに已みがたい衷心からのいのりとして、時代苦を共に分け苦しみ、そこからお光りを拜み出したいからなのでありますが、ある人は、革命思想の種子を蒔く危險至極のものと見てゐるやうであります。

　又、更に、說をなすものがあります。『一燈園はミディエーヴァリズム（中世主義）を多く脫してゐない、吾等の期待はかゝつて宣光社にある。』と。これは、一つの見方には相違ありませんが、前の諸

說と共に體驗を通しての聲とはやゝ違つた響きが感ぜられます。所詮、この生活は親しくやつて見ていたゞく外、ほんとうに御理解を願ふ方法はないのだと信ぜられます。

人類がこの世に生じてから何萬何千年になることでせう。この間に、國家の興亡と民族の盛衰とを見たこと數限りがなく、社會狀勢の變遷また目を駭かすものがありましたでせうが、一體、世の中は、善くなつていくのか、惡くなつていくのか、これについて種々な意見もあるやうですけれど、惡が存在してゐる限り、これから脫れ出る必要のあることだけは、論のないところだらうと信ぜられます。

いつ、如何なる世にも惡は存在してゐたやうに見えます。歷史のどの頁をひもといても、王者覇者と共に宗敎家が出現して働いてをられるのは、その時代々々の要求に應じて、社會の和安をいのられたのでございませう。

この意味に於て、一燈園生活も時代的產物と見るのが最も當を得てゐると思はれます。世評の如何にかゝはらず、身を挺してこの生活に入つて來られる方が、絕えずありますのは、之れを證するもので、何よりも力强いことであります。

事實が最も雄辯に物語つてゐます、一人、この生活を眞劍に行じてゐますと、その身邊に絡んでゐる難問題が、ひとりでに釋けてくるではありませんか。私は、その妙力を拜するとき、どうしても之れを人間のわざとは信ぜられないのです。

法華經に、地涌の菩薩——地から涌き出でた菩薩のことが說いてありますが、讀誦してをります

と、いふにいはれないありがた味を覺えさせられます。天くだつたといふ言葉、神ながらの道といふ云ひ現はし方にも、皆、これと一つのある通ずるふしがあります。私かに想ひます、一燈園生活は、その私への現はれはよし不完全であらうとも、確かにこの脈のものでなければならないと。

先年、アインシュタインが吾が國へ見えた時、京都でも講演がありましたが、私の友人がそれを聽いてきての歸途に立寄られて話されますには、

『天香さん、アインシュタインは、よく割り切りました。』

私は言下に

『割り切つたものは、アインシュタインの知識ですか？』とたづねました。蓋し、知識で割つたものなら、何か殘らなければならないと信ぜられたからであります。

『知識といへぬこともないけれど、所謂知識ではないでせう、たゞ方程式につくり知識的に扱つて學問的に說明したのだと思ひます。』

『さうですか。』

『一燈園もよく割り切つてゐますな。』

その友は、それから、私のやうな門外漢にもよくわかるやうな平易な說明を、アインシュタインの相對性原理についてしてくれましたが、この『一燈園もよく割り切つてゐますな。』には、知己の感がいたしました。

ニュートンの引力說がどうの、アインシュタインの相對性原理がかうのと、私のやうなものが、こゝ

で云々すべきではありませんが、友の説明を傾聴してゐますと、橋が流れて水が流れずといふ禪家の公案やら、如來、如として來るといふやうな事柄が、切りに聯想されたのであります。

全く、人類は、あまりにも長い間、こざかしい知識にあやまたれすぎてきました。文明々々といひますが、それに行詰ると、今更の如くに、自然に還れの、文明亡國のと、騒ぐやうです。此頃も、論壇の一角にさうした文明否定の叫びか聞かれるやうですが、一時の風潮でないことを願つてをります。如として來つた不生不滅不増不減底のものに本據を据ゑるでなければ、不動の安心立命は叶ふものでありません。すぐ次代の知識で訂正されるやうな、あやふやな假説を基礎として組立てられたものでは、その外觀が如何に壯大精巧でも、これに二つなき私共の生涯を委ねることは、あまりに冒險すぎはしますまいか。

今、一燈園には、殿堂もありません、祭壇らしいものもかざつてありません、正依の經典も特別に編纂されたものとてありません。又、修行にしても、禪宗のやうに坐禪して内心を觀つめることを旨とするわけでもなく、さうかといつて淨土宗のやうに他力本願に専らなわけでもありません。たゞ、一意、禪宗となり淨土宗となり、その他クリスト教の諸派にしても乃至新興の諸宗にしても、さうした各宗各派にあらはれる前の、如として來つた、知識以前のもの、認識を越えたものに、信賴し献身し、その御旨のまゝに奴僕の如く下座奉仕したいと祈つてをるのであります。

曾て、光誌の創刊號に、私は、天華香洞開扉と書しましたが、そのあまりのまばゆさに、扉を閉ぢて洞前にひれ伏すの外ありませんでした。申すまでもく、天華香洞は如來の境、一燈園生活者は、その洞僕として、眞心のかぎりをつくさねばなりません。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

この間、ある所で、一人の休職後備軍人に訪ねられたことがあります。『自分は戰爭に行つてゐた時、一つの疑問をいだくにいたりました。いつの戰爭にもよくある例で、決死隊の募集がありましたが、「自分も人後におちず、これに參加したのであります。上官から、「決死の士はないか」といはれゝば、そこに昂奮の氣が漲りまして、「私に行かせてください。」「私も加へていたゞきます。」といふ風に、その場にゐるとしては、どうしても申出でずにゐられなくなりますが、やがて、いよ〳〵決行の段になりますと、心も冷靜に復し、考へまいとしても、つひ、妻子のこと親のことから、それからそれへと色々考へさせられて、正直なところ、こゝでかうして死ぬことに、心殘りがされてならなかつたのです。これは自分ばかりではなかつたやうで、故意に落伍したものも隨分ありました。あの「萬歲」と呼んで死んで行くものも、心から滿足してゐる人ばかりではあるまいと思ひます。まがりなりにも、自分は任務を果して生還はしたものゝ、顧みて、一種のものたりなさを感ぜずにをられません。今の忠君愛國には、まだ〳〵純粹になりきらぬ或るものがあるのではありますまいか。兵士全部を悅んで忠死せしめることの出來ない軍隊には、欠けてゐるものが必ずなければならぬと思ひます。その純粹ならざるもの、欠けてゐるものは何でせう?』といはれるのです。

ずゐぶん、根本にふれた問題です。私がこれについて考へさせられたのは、一體、忠君愛國は、一部人士の爲めにするところある宣傳であるか、それとも、日月と共に宇内に炳乎として輝く神ながらの道であるか、といふ問題です。私の見るところでは、忠君愛國は、その最善の意味に於ては、神ながらの道と一つでなければなりません。さうであつて初めて國民のすべてをして心殘りなく死なすだけの權威が出てくる。さもない時、一時、人間のひつかゝり易い功名心でつゝたり、巧みな仕組の力で、命を差し出さすことは出來ても、もとより永續さする筈はありません。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

て、もし低級な外敵があつて之を侵さんとするなら、吾が國人を鎭護し外敵を討ちこらす正義の軍は戰はれて差支へないと信ぜられます。かうした神軍なら、決死隊を募集しても、一時の感激からでない參加者が得られ、落伍者を見るやうなことは決してなく、皆平然として死につけるでせう。これなら、萬歲といつて死んでも、念佛往生と一つことだと思ひます。

日本の國が眞に世界平和の實現を國是とし、日本の人々が正しい生活を目標として歩んでゐるとして、もし低級な外敵があつて之を侵さんとするなら、

一燈園は、我執迷妄に對して神軍を進めつゝあるものといふことも出來るでせう。軍營はいふまでもなく、背水の陣でなければならず、同人はもとより常々生死を越える工夫をめぐらさねばなりません。世間から、どうのかうのといはれた位でぐらついたり、家庭をもつてまごついたり、子供の敎育で行詰つたりするやうでは、この生活は、實にみぢめなものです。路頭を家とし、一切所有することを許されず、身に纒ふものとては、僅かに黑木綿の筒袖、口にするは殘飯と心得ねばならぬ暮らし方。貧弱といへば、この上なしの貧弱さであります。そして日々の行持はといふと、多く、奴僕の更に下位に座して、はき掃除、洗ひそゝぎをするにすぎません。たま〳〵所謂高級な頭腦勞働に服することがあつても、朝夕に雜巾を握り箒をとることを忘れないといつた具合です。

『〇〇さんは、今日どこそこで庭前をはいてゐました。』と話されることがあります。それはさう見えるだけのことです。しばらくさういふ形に現じてゐるまでなのです。人はその形だけを見て、とやかう云うてゐるのでせう。が、私共には、すべて、無作の業であつて、表象を絕した眞相は、ちやんと握られてゐなければなりません。無一物中無盡藏。一燈園生活の本地は、こゝにあるのであります。一燈園生活は、知識の所産でなく、如として來つたもの、お光りから惠まれたものと、私は確く信じて疑はないのであります。

（大正十五年三月二十二日東京一燈園武藏野道場に於ける天香師の講話筆記。文責は筆者にあり。松下生。）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

心證の一境に參じて

金子白夢

はしがき

西田天香兄。

昨年八月中旬岐阜縣のあの迫間の山寺で大兄と久しぶりで御目に懸つてから最う八ヶ月許りの月日が流れました。私はあの後講演やら執筆やらで忙はしい生活を續けて居るうち十二月から一月一ぱいチブスのために病床生活をせねばならぬ樣になりまして誠に良い經驗を致しました。實際私のやうな者に取りましては病氣そのものは確かに能い藥でした。御蔭で此の頃は大分に健康を恢復致しましてまた元の通りに働いて居りますからどうか御安心下さい。あの節大兄から「無一物中無盡藏」と云ふ一幅を書いて頂いたのを私は意味深いことゝ思つて珍藏して居ります。今保太郎兄の御依賴に對して原稿の債務を爰に少し許り拂はせて頂きます。これも唯だ私の心證上の一閃に過ぎません。どうか左樣御承知を願ひます。

修證不二

今から想へばもう十七八年いや廿年許りも以前のことになりますね。あの梁川氏を中心として始められた例の『回覽集』の中に御互に感想を書き合つた昔のことを私は今に懷かしい思ひ出の一つとして居ります。私はあの當時越前の福井市に生活して居つた頃なので永平寺の關係もあつたせいでしたらう。ひどく道元禪師に私淑したものでした。(勿論今でも私は道元禪師を以て日本高僧中の最も聖なる偉人の第一人者と思つて居ります)而して或る時あの『回覽集』の中へ私が道元禪師の「妙修ヲ放下スレバ本證手ノ中ニ充テリ。本證ヲ出身スレバ妙修通身ニ行ハル」と云ふ一句に就ての感想を書いたことがありました。それが其の當時ひどく大兄の氣に入つたものと見えて何んでも其の時大兄もあの句に就て『回覽集』の中で御感想を御書きになつたやうに覺えて居ります。加之大兄は其の後私に長い御手紙を下すつて道元の修證不二の境地を論證されたことがありました。私は今に其の時のことを鮮かに記憶して居ります。

天香兄。

實際、修證不二の境許り宗敎上の辿りとして意味深いものはありません。私は甞て私の『體驗の宗敎』と云ふ貧しい著作に於て此の修證不二の心境に就て斯う書いて見たことがあります。——

道元は『正法眼藏』中の「辨道話」の開卷劈頭第一に於て「諸佛如來ともに妙法を單傳して阿耨菩提を證するに最上無爲の妙術あり。これただ佛、佛に授けて邪あることなきは卽ち自受用三昧その標準なり」と垂示し給へり。觀じ來れば此の一句既に甚深微妙の玄味を語るものにあらずや。然り宇宙の妙法を單傳すると云ふ、これ實に不可說の一境也。此の一境に立つて阿耨菩提の妙覺を體得

して最上無爲の妙術を體現し來りし我が道元は、宗教的實驗の心證に上りて、自受用三昧の王座に入り、一切の萬法を自個心證の上に透見し給へり。あゝこれ眞の透見(ペネトレーション)。げにも妙へなるは宗教的意識の光耀に觸れて、此の透見の一境を靈覺したる光景にもある哉。こゝ一切は靈照(ヘルリヒカイト)の境也。光明(エルロイ)遍照(ツンク)の境也。此の自受用三昧に遊化して眞理の如實相を直觀せんには、正しくも端坐參禪を其の正門とせざるべからず。道元は此の端坐參禪の奥旨を闡明せんが爲めに別に『普勸坐禪儀』及び『學道用心集』の高著あり。而も道元一代の著作詮じ來れば此の端坐參禪の實驗錄たるに過ぎざる也。否、彼の一擧手一投足、一切の行動、一切の思想、一切の信念、彼に在つては悉くこれ此の端坐參禪より發し來りし一閃光たりし也。渾心渾靈、道元の凡ては悉くこれ卽ち禪そのものたりし也。是に於てか道元其の人は卽ち禪の一大化身也と謂ふべきなり。道元は端坐參禪の正門より入つて佛祖の大機を掌握し、人天の命脈を把捉せり。而も其の妙法は單に獨り道元の獨占すべき所のものにあらずして、一切衆生悉く法の所有者たらずんばあるべからず。これ道元が「此の法は人々の分上に豊かに備はれりと雖も修せざるには現はれず、證せざるには得ることなし。放てば手に滿てり。一多のきはならんや。語れば口に充つ。縱横窮りなし」と道破し給へる所以なり。實に此の法たるや天地六合に遍在し、一切萬有に内在する所のものあり。これ古人が「之を開けば六合に彌り、之を卷けば退いて密に藏る」と云ふ所のものにあらずや。人生に内在せる此の神聖にして微妙なる本具の神性(デヴィニティ)も未だ修せざるには現はれず證せざるには得ることなき所のものなり。此の本具内在の神性を發揮する、これ卽ち宗教の本領にあらずや。而も此の「修」や、此の「證」や本來二にして一

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

也。修は證の因にして證は修の果と云ふべき所のものにあらざる也。これ道元が「それ修證は一つにあらずと思へる卽ち外道の見なり」と示して「佛法には修證これ一等なり。いまも證上の修なる故に初心の辨道卽ち本證の全體なり。かるが故に修行の用心を授くるにも、修の外に證を待つ思ひ勿れと敎ふ。直指の本證なるが故なるべし。既に修の證なれば證にきはなく、證の修なれば修にはじめなし」と敎へ給ふ。茲に修證は不二にして本來一如なり。修證不二。證修一如。あゝ此の一境は宗敎的實驗の最も深き境にして坐禪辨道の極致なり。修外に證を求め、證外に修を要むるが如きは未だ以て宗敎的眞理の妙諦に接觸し得ざる所のものなり。宗敎上の體驗境に於ては要求卽感應の本地に入つて其の本來の風光を味ふべきなり。「こゝを以て釋迦如來、迦葉尊者共に證上の修に受用せられ、達磨大師、大鑑高祖同じく證上の修に引轉せらる」。由來宗敎上の眞理の當體は一超直入、珍瓏無碍の三昧境に參じて始めて體得し得べき所のものなり。こゝ卽ち「一分の妙修を單傳せる」辨道の境にして、初心の辨道は「一分の本證を無爲の地に得る」所のものなり。此の「本證を無爲の地に得る」と云ふ所に宗敎上の純粹無雜なる本地の風光、さながら花と薰じ光と照るところのものありて存ずるにあらずや。我が道元禪師は端坐參禪の正座に在りて端なくも此の本證を無爲の一境に看破して「妙修を放下すれば本證手の中に充てり、本證を出身すれば妙修通身に行はる」と云ふ甚深微妙の體驗に立ち給へり。あゝ何等絕妙の洞觀ぞ。道元の宗敎意識はこゝに其の高調に上りて洞然として明白なる法界の大光景を彼が心證上に透見したるものと謂ふべき也。あはれ奇すしきは此の無爲の一境に立つて宇宙法界、靈妙の眞相を如實に味ひ來れる我が道元の高風にもある

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

哉。

天香兄。私は今に斯うした考へを有つて居ります。修養が修養である間は未だ本當のものではないでせう。さうした手あかのついたものから——加工的作爲の生活から——離れて、さうです、「妙修」そのものさへ惜し氣もなく放擲し去つたところに本來の光が現はれて來るのでせう。「本證」を得やうの、「妙修」を修めやうの、と云ふ計らひが既に人爲的であり技巧的でありませう。さうした境地から全く解放されて本當に自然法爾と云ひませうか、御心の儘にと云ひませうか、さうしたやうな絶對境に入つたときに手に持つた妙修がすつかり自分の手から離れて始めてそこに「本證手ノ中ニ充テリ」と云つたやうに心境に立ち得るのでせう。併しながらさうした「本證」にこびついて居る間はそれもまだ本物ではないのでせう。そこで道元が「本證ヲ出身スレバ」と仰せられたのではありますまいか。妙修も棄て、本證も棄てゝ、棄てゝ棄てゝ棄てきつたときに御光が通身に輝くのではありますまいか。否、棄てる働きその働きが御光の働きでありますまいか。「棄てる」と云ふ、そこには未だに「私の」計らひがあるではありませんか。基督が「若し得べくば此の杯を我より過ぎ去らせ給へ」と云つたあの「過ぎ去らせ給へ」がある間は未だ純眞な境地ではあるまい。「されど我が意の儘にとにはあらず。御意の儘になし給へ」と仰せられたあの態度。あそこに「光」が照り輝いて居ると思ひます。修證不二の境は絶他力の境でせう。無碍光如來の光のみが一切を照らして居る境でせう。自他即一の境。否、そこには自と云ふべき自もなく他と云ふべき他もない。自他以前の心境。一切は純粹經驗の直接の具體的な現はれとでも云ひませうか。佛が佛を念じて居る世界であり、神が神と交つて居る

世界です。唯佛唯佛の境と『法華經』の記が語つたのもそこでせう。聖パウロが「神のことは神によつてのみ識る」べきものだと云つたのもそこでせう。

天香兄。

私は今淨禪不二のなかに私の宗教意識の辿りを見て居ります。基督の辿られた道がそれであり、古の聖者の多くが辿られた道がそこにあると思ひます。私は茲に今一つ道元に就て、私が最近感じたことを書かせて頂きます。それは即ち

趙州の行持

に就ての師の見方であります。

趙州觀音院眞際大師、形諗和尙と云ふ方は六十一歲のとき初めて發心求道して、瓶錫を携へて行脚して諸方を遍歷したと云ふのです。いつも趙州は自ら斯う云はれたさうです。

「七歲ノ童兒若シ我ニ勝ラバ我卽チ伊ニ問ハン。百歲ノ老翁我ニ及バズンバ我卽チ佗ヲ敎ヘン。」

斯うした眞劍な態度を續けて南泉の許にあつて二十年間の修養をなされたと云ふことです。私は斯うした趙州の發心の態度と其の眞劍さとを見て自分ながら非常に耻かしく思ひます。斯うした初な態度を六十歲乃至八十歲の老人が續けて居つたと云ふこと丈けでも既にもう私共の師と仰ぐに足りて居ります。今の我々にはさうした眞劍さが全く乏しい。自分ながら全くあきれて了ふ。もつと眞劍さに生きねばならぬといつも思つて居りますが、實はさうした考も棄てねばならぬのであります。その

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

「ねばならぬ」も棄てねばならぬのでせうね。

道元禪師が此の趙州の行持に就て斯う云つて居ります。

古佛の家風聞くべし。……未だ八旬に至らざらん餘人は、師よりも强健なるべし。壯年にして輕爾ならん我等。なんぞ老年の崇重なると等しからん。勵みて辨道行持すべきなり。

壯年時代の道元禪師が趙州の行持に感じて自ら奮勵一番したことはやがて我々を鞭打つて居るのではありますまいか。「四十年の間、世財を貯へず、常住に米穀なく、或は栗子椎子を拾ふて食物に充てられた趙州和尙の生活を見ては其の高風を欽慕せずには居られない。道元禪師も「戀慕すべき操行なり」と賛嘆して居られます。私は今の世に戀慕すべき操行の持主に出遇はないことを無上の悲しみと感じ、そこに限り無き寂しさを覺えます。

趙州和尙或る時、衆に示して曰く――

儞若一生、不離叢林、不語十年五載、無人喚儞作啞漢、已後諸佛不奈儞何。

十年五載、不語であつても叢林を離れざる功夫によつてそれは決して啞漢ではない。沈默、深い沈默のなかにのみ眞の生命の呼吸がある。我々は餘りに饒舌である。語るに忙はしくして深く考へ、深く味ひ、深く觀ずる時を有たない。深い冥想のない生活、そこには深い人生はあり得ない。餘りに仕事にのみ――仕事のための仕事にのみ――沒頭し、忙殺されて居る現代生活のなかゝら「人」の出來て來ないのは當然なことであります。

道元禪師は更に斯う云つて居ります。「行持の至妙は不離叢林なり。不離叢林は脫落なる全體なり」

と。然り人間は大自然の温かい懐に育まれてのみ生長し、發展して行くのです。現代人のやうに大自然の胸からもぎとられて了つて淺薄な人間的な技巧的な文明にのみ色づけられた生活からは何物も生れて來ないではないでせうか。脫落人の生活、さうした廓然無聖の本地には到底現代人は立ち得ないのではありますまいか。機械と便利と利益と打算。そこには眞の深みを有つた生命の萌芽はあり得ない。全體としての生活の脫落底、そこにのみ眞の深みづけられた生活が開始されるのでありませう。

意味深い道元禪師の左の二句のなかに私は無限の暗示を見出して居ります。

鳥路は一叢林なり。

偏界は一叢林なり。

叢林とは決して單なる山寺の道場のみを云ふのではない。さうした固定した所にのみ叢林を見ると云ふのは既に死んだ考方でせう。道元禪師の見た世界は果てしもなく廣く又無限に深い床しい意味を有つて居る。師が空飛ぶ「鳥路」のなかにあの森々たる樹木の繁茂した叢林を――宗敎的な修道院を――見たのは如何にも詩人らしい、哲人らしい、師の面影を偲ばせるではないが。鳥路！ 如何にも味ひ深い表現だ。鳥路！ 無限の暗示がそこに流れて居るではないか。私は嘗て『聖闇の境より』と云ふ私の著作の中で斯う書いて見たことがあります。

基督は「空の鳥を見よ」と仰せられた。誰が其の眞相を見たであらう。實在が鳥の形して自己をそこに語つて居る。一羽の鳥の姿に「永遠」を見、「無限」を尋ね、「神」を偲ぶ者にして始めて鳥の姿を見たと云ふことが能きるではないか。基督の見た空の鳥の背景には否、其の眞景には、然り其の前景には「永遠者」そのものが御手を添へて居るではないか。「汝等の天の父は之を養ひ給へり」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

と云ふ。何と云ふ深い見方だらう。天父の愛懐に生きる鳥の姿は鳥にして鳥ではない。道元は「空濶ふして天に透る。鳥飛んで鳥の如し」と云はれたが本當に然うだ。「鳥の如し」。何と云ふ深い見方だらう。そこに眞の實在の見方がある。

曾て詩人ブライアントがあの「水鳥」の詩に於て「無限の深淵」と云つたのもそこだ。漱石氏が「鳥飛而入無際」と云つたのもそうした神秘な叢林を看破した見方ではあるまいか。ヘブライの詩人は嘗て小鳥のその雛を育くは巣を以て「これ汝（神）の祭壇なり」と歌つて居りますが今我が道元は無邊際の天空を飛び翔けるあの跡なき跡を辿る鳥道の一路を「神の祭壇」と見たのである。そこに欝茂たる大森林を見たのである。詩の境だ。美の世界だ。そこに宗教人の一大道場を見た。觀る世界のなかに神と交る消息を語られて居る。

更に道元は「偏界は一叢林なりし」と云ふ。然り大宇宙そのものが一個の山林であり一個の道場である。さう見るところに眞の宇宙觀があり、徹底した宗教觀がある。哲學上の概念的な宇宙觀は未だそれは平面的描寫たるを免れない。然しながら宇宙を一大道場と見るところ――基督は天地を「父の家」と見た――そこに眞の立體的な見方がある。生命のリズムがそこに莊嚴な建築美として其の如實の相を自現して居る。私は道元禪師の斯うした見方を詩として見た宇宙觀であると思ふ。併しながら詩的表現によつて言表された斯うした見方のなかにのみ最も深い宇宙的な宗教觀が暗示されて居ると思ふ。

天香兄。

斯うしたことを古典に耽りつゝ感じた儘をここにおいて私の雜誌『光』に對する負債を拂ふことに致します。（四月一日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

臺灣に學ぶ（下）

松下吉衞

此度は蕃人についての見聞を申しあげませう。

臺灣全島の中央部に位してゐる埔里街（海拔一千四百尺の高原）にある平戸支店を訪ねがてら、霧社の蕃地を見せて頂いたのですが、敎へられるところが少なくありませんでした。霧社へ參りますのは中々容易でなく、縱貫鐵道の二水驛から入つて私設の輕便鐵道や臺車に數時間づゝ厄介になつた上に更に一里も徒步しなければならないのです。蕃地へ入るには、今でも許可證を官廳から受けねばなりません。許可證には滯在の期間から旅行の目的から原籍住所姓名まで記載させられ、蕃地へ到着すると共に警察署へ屆け出ねばならぬ規定になつてをり、之を怠ると容赦なく罰金を科せられるのださうです。蕃人に對する當局の用意の周到さを見て、蕃地訪問に多少の不安を感じないではありませんでしたが、霧社にはもう何年か前から埔里の平戸支店と取引のある內地人の店も一軒あると聞きましたので行かせてもらふことにいたしましたのです。

霧社は、もう中央山脈の脊筋に近く、三千七百八十九尺といふ高所に位してをりますので、能高山はじめ、どつちを向いても高山秀峰が聳え立つてをり、その溪流に沿うた山系の中腹どころを縫うて點々小舍が營まれてゐるのが見られますが、これがいはゆる蕃社を形づくつてをるのであります。何

故かうも山奥の高地に、しかも四十五度もあらうと思はれる急傾斜地に生活を營んでをるのか、常識の解釋は三百年前支那民族渡來して彼等を平地から追つた爲めだといひ、或る學者は狩獵を生業とする彼等の生活が高山住居に導いたものだとなしてをるやうですが、私達と時代を同じうしてかうした人間生活の事實の存在してゐることを見るとき、いろ〳〵考へさせられるところがあります。

霧社へ私達がまゐりましたのは二月上旬でしたが、もう臺灣櫻は盛りを過ぎてゐました。蕃人の子弟のみを收容してゐる公學校を訪れたところ、私達のために特に生徒の話し方や唱歌の演習をしてくださいました。シャツのやうに出來てゐる簡單な着物に風呂敷のやうな布を無雜作に首から前の方につるして、參觀者に臆する色もなく、明晰な日本語で話した子供の態度は、內地の小學兒童と伍しても、少しもはづかしくないものと思はれました。平戶氏など、あゝいふ小さい人等にあんなにやられると涙がこぼれるといつてゞした。

この學校に大變蕃人と親しい先生がゐまして、放課後にわざ〳〵蕃人の住居へ案內してくださいました。

蕃人の生活は、それは簡易至極なもので、臺灣人がどうのかうのといつても、とても及びもつきません。立樹の枝や竹で出來てゐる五坪位な長方形の小舍が、あの人等の唯一の生活の本據で、隅の方に竹編か何かの漸く一人の體を橫へるに足る寢床がある外、すべて土間であつて、備品といつては、狩獵用の鎗劍が數本、水がめのやうな形の土器が二三ヶ(これは水を入れたり、常食の粟の小出し用にしたりする)煮たき用の平鍋とそれに簡單な織器ぐらゐが、まづ目ぼしいものなのです。案內役の先生

が、何やら煮物をしてゐた蕃人の小娘に蕃語で話しかけて、その邊にあつた松材らしく思はれる木片を刻んで點火したら、油炎をあげてよく燃えるのです。

『これがこの人達の燈火なんです』といつて、先生はほゝえまれました。

この住居の外に、粟や稗などを貯藏して置く納屋がございますが、建坪三坪か四坪もありませうか、地面から三四尺の高さに杙がうつてあり、その上に鼠返しと稱する圓形の平板が据ゑられ、更にその上に竹や木の枝で圍まれた茅葺屋根の倉庫がおさまつてゐるのです。

住居の模樣から大抵推測される通り、この人達の日常生活の簡易ぶりは、實に徹底的であり、食事は、主食物である粟を煮た鍋を圍んで振り拳をシアジ代りにして鍋からぢかにすくつては食べ合ふので、副食物といつては鹽水か、せいぜい生薑、山胡椒ぐらゐなところです。ですから、鹽を、この人達の珍重することは非常なもので、かつて生蕃討伐に、佐久間總督時代であつたか、鹽を絶つ方策をとつたことがあるときゝましたが、これには困つたらうと思ひます。途で行きあつた蕃童に弟が一行の辨當の殘りの食パンと白砂糖とを與へたが、砂糖の量がやゝあつたので、家へ持ちかへつてから分配が大變だらうなどゝ噂しあつたことでした。

また、温浴は更に行はれないらしく、寢具は毛布のやうなもの一枚だけです。

婚姻は、大體、一夫一婦制で、新夫婦が出來れば多く別居する習はしであるさうです。お產は內地人の想像も及ばぬほど安易で、產婆など勿論をらず、皆自分の手一つで始末することになつてゐるといふ話です。部落によりますと、獨身の男子だけは倶樂部のやうな組織になつてゐる合宿所に寢起す

るときゝました。

こちらに三軒、そちらに五軒といふ風に、集團をなして建てられてゐる蕃舍の間に立つてふと感じましたのは、一燈園でも、道場を中心にして、かうした雨露をわずかに凌ぎ得るくらゐのさゝやかな精舍を、ほどよくあちこちに營み、獨身の修行者は道場内の部屋々々にあつて從前のやうな托鉢にいそしみ、家庭をつくられた同人はこの精舍を預つて、こゝを巣として虔しい生活を治生産業に具現するといふ風にしてはどうかといふことでした。この武藏野道場を例にしても、家族のある同人が、この附近に三々五々さゝやかな精舍を營み、或は社會事業に或は養鷄出版等の業務に奉仕して、光の村を形づくることは、さう遠い將來ではあるまいと信ぜられます。

さて蕃人の生業でありますが、今、狩獵時代から漸く農牧時代に移りつゝあるところで、多く粗笨きわまる切替畑の方法で山野を輪耕してをるのであります。粟など實のりますと一房々々ちぎりとり、收穫後の畑へは火をつけて肥料とするのださうです。總督府經營の指導所が種々農耕のことを教へようとしても中々きかないので困ると、公學校の先生はいうてをられました。

女が實によく働くのが目につきました。可なり重い荷を脊負つて坂路を上りながらでも、行きあふ女がみな麻糸をなつてゐるのです。機械や動力に少しも依らないあの人達の生産の能率では、あゝもしなければ一年かゝつても着物一枚織れないのではありますまいか。

蕃人は殆んど數の世界を持つてをりません、わずかに小石や析枝で用を辨じてゐるのです。文字通りに山中暦日無しで、草木の開化落葉、乃至氣象の變化によつて農期を知るといつたやうな具合なの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

です。早天、東山の白むを望んで起き、終日、家族こぞつて土を耕し山に狩り、月明の夕には高峰によぢて心ゆくばかり空嘯く彼等の生活は、天災に對する畏怖を外にして、脅威を感ずる何物もなく、その社會制度は、さのみ中央集權的でない頭目制であるので、個人の自由は文化人に比して優らうとも劣つてはゐないといへませう。人種學上、馬來系統に屬するものとされてゐる彼等は、現在、七種族を數へ、部落數七百有餘に上り、人口十三萬六千を算してゐますが、外貌等から常識的に判斷しますと、私には支那民族よりは餘程同血的に直觀されました。どうした事情か知りませんが、あふ生蕃もあふ牛蕃も、いとなつかしげに『今日は』と向ふから挨拶するのです。好んで敵人の首を狩り來り、それから滴る生血を酒盃にうけて仲間同士相擁して觀び飲むといふ蠻風のあることをきゝながらも、顏や頬に並行線形交叉線形の入墨をした見るからに物おぢを感ぜしめる娘が、私達と行きあひざま、何をはぢらつてか、手にて半顏をおほひ、やさしく會釋するのにあひましては、全く意外な想ひがいたされました。こんな經驗は臺灣人との接觸に於ては不幸にして絶えて見られなかつたところであります。

蕃人の現狀を以て吾等の祖先の原始時代に於ける生活そのまゝであるとなすのは不當であり、また現代文明の澎湃たる本流を堰して水源地に還らさうとすることは出來ない話でありませうが、事實として吾等の文明社會に容易には根絶しがたい苦惱と不安とがあり、蕃社に於ける生活に一種牧歌的情調の掬すべきがあつて人々が愛と自由とを享有してをるとすれば、吾等の目指す文明の方向について少しく顧るところあつて然るべきだと考へられます。

他の事情さへ變らないなら、物の裕なのは決して惡い事ではない、それは事態をより善くする可能性さへもつてをるものでせう。この意味からいつて、物資の豊富をもたらした機械文明そのものは少しも呪はるべきではありますまいが、機械その他の資本が個人の私有になつてゐるばかりに、少數の極端な富者がある一方に乏しすぎる人々が澤山に生じ、そこから種々やかましい問題をかもしてゐること皆様の御存知の通りであります。かうなつては、文明も進歩も無批判に是認されますまい。人の和が、第一だと思ひます。これを犧牲にして文明も進歩もあつたものではないでせう。清貧主義となると、一つの趣味であり、四はれでさへあるやうにもとれますが、人の和を最上に値打ちづける立場から、私達は、蕃人の生活に學ぶべきところ少くないと感ずるのであります。

話が少し堅くなりすぎたやうです。

霧社蕃を訪づれた歸り途に臺灣名所として最も聞こえた一つである日月潭の勝景を探ねました。これは海拔二千四百尺の高地にある大湖水で、日潭と月潭とから成つてをり、周圍四里といふことです。大山、大尖山等の峻峰がまはりに聳え、大小幾つかの浮島が浮いてゐます。よく遊覽客がするやに、私達も船に賃して對岸に渡り、化蕃の女の有名な『きねうた』をきかせてもらひました。初めはどんなものか知らと思つて可なり好奇心をそゝられましたが、臺灣人の船頭さんが船を岸につけて何やらどなりますと、二十數軒の蕃社のあちこちの家から、娘、老婆、年增、乳呑子をかゝへたもの等ぞろ〳〵十何人が出て來て、兎の餠搗きよろしくの恰好で、平らな敷石の埋まつてある周圍に杵を持

つて列び、トントントコトンといつた調子に杵で敷石をたゝきながら譯が解らないながらもどこかかう私のやうなものをも大昔に引きずり歸す力をもつた蕃歌を歌ふまでは無難でしたが、『モシ〳〵龜ヨ』だの、『出テコイ〳〵池ノ鯉』だのが出てまゐりましては、よく〳〵歌によるこびを金錢で買つてゐるのだといふ意識が濃厚になつて、蕃人に對して大變すまない、すまじきことをして了つたといふ實感に打たれたのでありました。

こゝは風光のすぐれてゐるばかりでなく、臺灣電力會社が十五萬馬力の電氣をこゝで起す計畫を立てゝ目下その工事中でありまして、これが竣工の曉には、臺灣全島の汽車といはず燈火といはず工場といはず凡てを電化して尙あまりがあるとの話です。

阿里山へも行かせてもらひました。これは新高山の西方支脈中の蕃界嶺一帶の西に面した部分の總稱で海拔最高八千八百尺に及んでをります。嘉義の北門驛から山顚の沼之平驛まで四十四哩の間、ずうつと二十分の一急勾配が續いてゐる高山鐵道に乘つてまゐるのですが、一時間に上り六哩、下り七哩の極ゆるい速力であつても、實にヒヤ〳〵する場所が幾ケ所もございます。沼之平驛から更に山奥になつてゐる終點の眠月驛までは貨車ばかりが通ひますが、全線を通算しますと百近くのトンネルがあるに徵しても、その如何に難工事であつたかゞ想見されます。何でも設計替をすること三度にも及び、工事に壹千萬圓の經費を要し少なくない犧牲者を出してゐるさうで、高山鐵道としては世界一とのことです。賃金も四十四哩二圓八十四錢で世界的レコードださうです。なぜ總督府がこんなにも經

費をかけて七千幾百尺の高所まで鐵道を布設したかといふと、阿里山の森林は面積一萬一千甲、蓄材量二千二百萬石と稱せられ、年産額百萬トン以上で、樹形の完全なこと木會材にまさつてをり、臺灣の一大寶庫であるからであります。全山が紅檜、扁柏等の巨木で蔽はれて居り、斧鉞のまだ加へられてない場所へまゐりますと、何と說明したらよいか一種おごそかな氣に打たれて、おのづと首がさがるやうな心になるのです。七千二百尺の高地に樹齡三千歳（專門學者推算）全長百五十尺の紅檜が神木として祀られてありますが、兩手をひろげて周圍を實測して見ましたら十三尋ございました。明治神宮の大鳥居の用材もこゝから獻上したものださうです。毎日々々伐木して居り、そのあと〳〵と植樹が行はれてゐるやうですが、今後何十年伐木したとて俄かになくなりさうにも思へません。伐られた木は、嘉義まで下されて、こゝで驚くばかり完備してゐる製材所に於て、何十人かゝつても中々こなせさうもない巨材が、機械の番人のやうにそつちこち要所々々に立つてゐる少數の人間の手でいざくられて見る〳〵板にされ角材にされて了ふのです。これが、どこの誰によつてどう用ひられるのか、阿里山の山の精は知るよしもありますまいが、自然の恩惠を濫用することがないように祈りたいものであります。

阿里山上には三日間滯在いたしました。この間、商と道とをどう合致させるかについて、平戸本店臺中支店、嘉義支店の主人方や弟と實際問題にふれて練り合ひ、深更午前二時に及んだ夜もありました。夕方からは雲海が美事に現はれ、瞬間にして變幻するその奇しき眺めをほしいまゝにしながら、一同端座して調和道の實修をいたしました折のスガ〳〵しさは、今だに忘れられません。

松本安藏氏が經營してゐられる北投温泉の『上の湯』には風呂の大好きな私のことなので同氏のお招ぎをよいことにして、度々まゐりました。温泉の性質は硫黄泉です。松本氏の持ち山は六萬坪もあり、温泉宿は三年ほど前に出來あがつたもので、工費三萬圓を要したとのことです。松本氏はこの温泉宿の扱へを道によつて行はうとして熱心に努力してゐられます。私のあちらに滯在中、創業以來長らく理事長を務めてゐられた臺中信用組合をお引きになり、渡臺卅何年間從事なさつた辯護士業もお止めになりまして、此度いよ〳〵温泉宿を中心とする奉仕の生活に專念いそしまれる御覺悟を示されました。まことに悅ばしいことゝ存じます。たゞ、宣光社は組織替をしたゞけでは、云ふまでもなく、だめで、そこの雰圍氣がお光り化されなければならないのでせうから、複雜な世間に觸れ從つてその經營に色々な役割を必要とする温泉宿の如きにあつては、決して容易な業ではありますまい。蒸溜水では魚が生きられず、さうかといつて、泥水にしてしまふては、また何にもならず、程のよさといふのが實にむづかしいところで、これは言葉や文章で如何に巧みに說いたとて何にもならない話でして、默つてディーット自ら行ずる外、體得はなりがたいものでありませう。

臺北で『人類の家』といふのを見せてもらひました。稻垣藤兵衞氏の獨力經營するところで、公學校にもあがれない本島人支那人の敎育機關であります。生徒は百人あまりをりましたらうか。三組に分かれて、本島人の先生から總督府編纂の日本語の敎科書を敎へられてゐました。『人類の家』の名

稱が表はしてゐるとほり、稻垣氏は民族の徹底的和合を敎化事業、社會運動を通してなさつてゐる方で、臺灣語も非常に巧であり、御案內を得て、民族運動の方面を見學するつもりでしたが、急遽こちらにもどるやうになつた爲め、目的を果たすことが出來ず、殘念でございました。臺灣議會開設の運動が近年盛んになりつゝあるので、これは、是非、あちらに御緣のある同人の方に御研究ねがひたいと存じます。

臺灣を立つ前日でした、乏しい時間を都合して臺北郊外の臺灣神社に詣でました。これは、大國主命、大已貴命、少彥名命の三柱一座と、あの北白川宮能久親王殿下の英靈とをお祀りしたもので、劍潭山といふ小丘の中腹に位し、江流に臨んでをり、境內が實に廣く、十五萬六千坪あるとかきゝました。眺めが大層よい所で、社前に通ずる道の兩側にずうつと建てられた幾十對の石燈籠は、わけて神さみしい思ひを催させます。たゞこれらの燈籠の獻上者が、悉く將軍華族に非ずんば大政治家であつて、平民もしくはその代表者の名の刻まれてないのを見て、私はさむしい氣持がいたしました。明治天皇なればこそ北白川宮殿下をこゝにお遣はしなさつたのであらう。そのお心が私共にもわかるやうに思ひます。日本の神は、日本の民衆によつて祀られなければならぬものでありませう。臺灣が日本の特權階級によつてその利益を占有される時、領臺の公正な理由は存在しなくなる。內地人も本島人も、有產者も無產者も、自然と文化の恩惠に浴するに均等を缺かないことを原則とする施政方針が樹てられてある限りに於て、私共は良心に咎められないで臺灣に遊び臺灣の人と交ることが出來るの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

であります。

今、臺灣はマラリヤの國でも首取り鬼の島でもなくなつてまゐりました。そして、四時、野菜果實といはず、穀物といはず、魚類肉類といはず、大變豐富でありまして、ほんたうに住みよい樂土といふことが出來ます。かうなるまでには、しかし、なみならぬ犧牲が拂はれてゐることでございます。軍人、巡査、教師等にして、屍を彼地にさらしたもの幾百千の數にのぼつてゐるか知れません。臺北附近の芝山巖は、領臺當時學塾を開いて本島人の子弟の教養にあたつてゐた七人の師範校卒業生が土匪に襲はれて殉職した所で、毎年二月一日には全島の教育關係者が集り盛んな祀りが行はれてゐますが、かうした犧牲は、中外に施してもとらざるべき日本の國是――それは必ず人類の意志と合致する筈の――の爲めにこそ拂はれたと信ずべき理由があると思ひます。

又、現下世界注目の的となつてゐる日本の對支政策の小手しらべとして治臺方針が可なりに重要視されてもゐるやうです。民族的偏見は恐くは本能的のものでありませうから、異民族相觸れる時、無意識の間にもそれが働いて、どうもほんとうに一つになりきれにくいものでせうから、私共は、意を用ひて、民族我、國家我に囚はれない國境を越えた立場に立ち、同時に私共にとつて日本國を外にしては私共の存在を考へ得ない事實を確認する見地から、光明正大な治臺政策の實施を、この上にも、懇禱せざるを得ません。

少年の日「臺灣入」の琵琶歌に感激の涙を流した私は、常夏の國とはいへ雨を含んだ夕風の肌寒い紀元節の前日、親しく臺灣神社の社前にぬかづき、思ひを三十年の往時に馳せては、路頭行乞の乏しき身にも、色々と考へさせられまして、急かに立去りがたいものがありました。(終)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

乞食の歌える

すゞき五ろう

靄こむる
池の面
ほのかなる
光り射し
白蓮の
静かに咲きぬ

釋迦牟尼の
さすらい給う
汀のあたり
青き葉の
底なる露の
玉と光りぬ

あゝ、かゝる朝
一片(ひら)の
花ともなりて
一滴(しづく)の
露ともなりて

御佛の
圓(まろ)き心を
慰めたるか、
路の邊の
乞食ながらに
何となく　掌(たなごころ)合はせ
我が身の幸(さち)を
拜(をろが)みまつる
今朝の
よろしさ

航　路

人生の航路を
様々な船が行く、
あるものは　弱々しく
あるものは　堂々と、
又は　舊式な老朽船が
ぼろ〳〵に　破れた帆を
辛うじて　張りながら、
その側(そば)を　飛ぶ様に走り越す
輕快なモーターボート、
あゝ、大きな達磨船の前を
突つ切ろうとした　可愛いヨットが
梶をとりそこねて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

ひつくり返つた、
そんなことも　知らぬ顔に
屋形船が　軒に
岐阜提灯を下げながら
汀の近くを　こつそりと行く、
あゝ、是等のうちの
何れだけが
最後の目的地まで
よく覆沒(くつがえ)らずに
行き着くだらうか？

足跡

神殿が
土足で暴された、
村の至聖所が
地の穢れで
汚(よご)された。
　村人は驚き騒いで
口々に呼ばわつた。
「神殿を
　土足で穢した者は
　誰だ？」
「神罰を怖れぬ
痴漢(しれもの)は　何處に居るぞ？」
　やがて　その聲は
村中に傳わつた。
　村人は　右往左往して
狂氣の様に叫んだ。
「おゝ、審きの日が來た！」
「おゝ、天が裂け　地が崩れる
　時が來た！」
　怖れと　憤りで
夢中になつた人々は
蟻の巣を　壞した樣に
一齊に　社の庭に
群がり集まつて、
地獄の口を覗く樣な
慄え上らんばかりの恐怖と
壓え切れぬ好奇心とに
馳られて
その「破滅の足跡」を
自身の眼で確め樣と
ひしめいた。
　しかし　その時
凡ての者が　土足で
その神殿を　穢して居たことには
誰一人　氣がつかなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

武藏野道場の歌（二）

野木典郎

十月十八日朝

明けてゆく大野の原のひとこころ命寄す處と寢宿にけるかも

秋の夜はあかとき初めてなほ暗しくらきに起きて身をすすぎをり

岡の際に霧か裾引く氣配すれ暁ときとなるしづけさにして

ぬばだまの夜降る霧は遠き野の木末に著きてあくるとすらし

ゆたかなるこの國土をなつかしみ秋の長夜を安眠しにける

あづまなる廣國原の起き伏しの間に住みて命終らむ

夜べ雨の雫をもてる小竹の葉は朝光にみちてさゆらぎてをり

竹の葉の色のすがしさ風吹けば諸葉なびきて陽の光とほろ

在所正覺院

草葺きのみ堂の屋根の陰はしら年古りいます朽木と匂ふ

いく世をか經りし扉の奥深く晝なほ燈す一つの光

山かげのみ堂の軒にむしにける苔より出づる水したゝれり

同じく托鉢

軒の下に育む小石をうごかしてこゝろ虛しく落葉を掃き居り

一葉を愛書に栞す

深秋と散れる木の葉のかなしくて遺敎經の折りにひそめつ

山院の枝垂り古木にかゝりたる銀杏落葉よ沖して惜まむ

月二回の同人會の日は晝間多く

清遊をゆるさる十一月七日

秋の野にひと日遊ぶと飯を握りもんぺの袴を借り履きにする

丘の上に手足を伸べて行く雲の白きを見つる陽かげとなるまで

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

路上石像

秋草の花野に立たすみ佛のみ肌冷し夕陽の光り

秋草の花の束を手に持ちて何方ともなく憬れにけり

病後の身道場にある日多し

松男らがまきおきにける小松菜を味噌汁に入れてことは足らへる

床につくことあり

わが友はわれの弱きをあわれみてなまぐさものをゆるされにけり

この村の媼九十餘歳にてみまかれるに呼ばれて

村一の命を生きてそこばくの昔の土となりましにけり

鴫來鳴く丘の奥なる奥津城にあわれ村人を葬りにけり

同じく歸途

葬所の鉦のかなしさ打止みて夕かげ寒く人散りにけり

音のみして鴫こそは啼け野の中の淺き水田にうつる夕空

す枯れたる畦草くろく水にうつり寒きさゞ波たちにけるかも

夕寂る空の澄めれば久方の思ひは馳よれ知られざる國

信洲に光友柴田なか姉病む

家人のたのしまざるを己が身の一つに悔いてみ文たまへり

嫁の身に親と子と持ちされどこの長き病に耐へて祈れる

囚なすさだめすべなし生れつぎ托鉢せんと言のかなしさ

家に在る朋を思へば家を省ぬ我らは愧ぢぬされどもゆるせ

常弱き身すらを持ちて冬に入る今日のこのごろの自が心はや

このごろ

かへり來し心ひそけき新室に線香の匂ひしみているなり

このごろの夜の語りよ各もおのもあかぎれ膏を熱がりにつゝ

齊京兄の齡二十にあまる

あかぎれのきれしもろ手をおしいただき痛む肋膜にあてゝもらひき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

隠れたる純情の人々

谷口雅春

一、『愛を歌ふ』の著者

私は最近鳥谷部陽太郎氏の散文詩集『愛を歌ふ』を讀んで非常に嬉しく思つた。その嬉しさを『光の友』諸君に傳へたいと云ふ希望が此の一篇を書かしめた動機の一つとなつてゐるのである。

『愛を歌ふ』は『こどもの世界』『街頭篇』『幼兒禮讃』等の數篇より成り、各篇がまた長短幾十章の散文詩から成つてゐるのである。試みる『街頭篇』の中にをさめられた一篇を茲に引用させて載かう。氏は歌ふ——

秋晴の一日、私は友と肩を並べて
東京の大道を
街から街へと散歩して行く
初めには、空の美しさに
心も朗かになつてゐたが
やがて行き交ふ大道を歩める人々に
私の考へは捕へられて行つた。

これがその書き出しである。それから數行を飛ぶと、

『何故かくも數多い兄弟が
單に紹介を經ないと云ふ理由で
親しく睦交ることが出來ないのだ！』と。
恐らく此の人々の中には
私の敬愛する親しい友にも劣らない
善良なる兄弟がゐるに相違ない、
そして卓拔な才能を持つてゐる多くの兄弟も。
然るに何故、他人であると云ふ理由に依つて
人間が人間として
人間と親しく言葉をかけることが出來ないのだ。
何故そこを歩いて行く
あの善良なお爺さんと握手が出來ないのだ。
何故あの店頭をヨチヨチと歩いてゐる
可愛らしい幼な子を
私がおんぶしてはいけないのだ。
おゝ兄弟よ我々を隔てる此の意味なき一線を乘り超えよ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

純愛のある所、そこに人生の樂園は存する
人は人の純愛をふみにじる事が出來得ない。
愛に生きよ！
兄弟は今こそ、その胸の扉を開いて
兄弟に愛の手を差し延べよ。
兄弟はお互ひに握手せよ。
お互ひに信ぜよ、お互ひに賞讃合へよ
…………………………

『人間が人間として』『互ひに握手せよ！』『愛の手を差し延べよ！』『互ひに信ぜよ』『互に賞讃せよ。』——これこそ彼れ鳥谷部陽太郎氏の叫びなのである。

鳥谷部氏は一燈園には何の關係もない、けれども此の熱烈な叫びを聞かされる時、一燈園に關係がないと云ふ理由からして、『光の友』に此の純愛の人を、この純愛の著述を、紹介してはならないと云ふ理由があらうか。彼は高らかに叫ぶ。此の腹の底から絞り出さるゝ聲を聞け。

『人間が人間として！
何故親しく言葉をかけることが出來ないのだ
………此の意味もなき一線を乗り超えよ』
と。

鳥谷部氏は唯の詩人ではない、併し石川啄木が、人間の魂を握り絞めて歌つたと云ふ意味に於て推賞さるべきであるならば彼もまた同じ意味に於て推賞されねばならないと思ふのである。そして啄木は恐らく自分の病弱のためにであらう社會的な仕事にとりかゝることが出來なかつたと思はれるが、鳥谷部氏のこの『純愛』は一方には『詩』となつて、他方には實際的畫策となつて迸り出た。

氏の『純愛』の發露たる實際的畫策とは『兄弟組合』の提唱であつた。『兄弟組合』の信條に於て彼はかう書いてゐる。——

我等は兄弟愛の精神もて地上生活に於ける最も美しく相互扶助の世界を建設せんと努

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

力する。

愛と理性とは行爲の規範であり、生活の眞髓である。

この信條にもとづいて氏は、『兄弟愛』を基調として事業として、差當り兄弟ホーム、兄弟食堂、兄弟印刷所、兄弟圖書館、兄弟出版所、兄弟農場、などを設立するために同士の加盟と醵出とのために努力して、その努力の一端として、『兄弟印刷所』を作つたり『兄弟愛圖書部』を設けて無料貸本などのことを行ひ、又毎月『兄弟の會』をひらいて、『孤獨の寂しさに堪へぬ人はお出でなさい、慾で固つた人々に厭きた人はお出でなさい!』と叫んでゐたが、關東大震災のために『兄弟印刷所』は不幸にして燒盡し、氏の事業に一頓挫を來さしめようとしたのであるが、氏は詩人であると共にどこまでも實行の人である。氏の事業も次第に近頃復興しつゝあるかのやうに見える。自分は氏の近著『愛を歌ふ』が多くの人々に讀まれ氏の事業を進捗する上にも、それが間接に扶けとなれば好いと祈らずにはゐられない。

二、谷口晴惠さん

谷口晴惠さんと云へば、自分の親類かなどのやうに思はれる人もあらうが、播州宍粟郡の人で自分とは全くの他人である。若い人かと思ふと、もう女學校へ行く子供までもつてゐる人である。自分はまだ會つたこともない。併し、この人を自分はその人からの手紙によつて知つてゐるのである。多分この人は鹿ケ谷の門をくゞつた人だと思つてゐる。兎も角この人が『光の友』であることだけは事實である。何故なら『光』誌によつて自分を知り、自分に手紙を遣こすやうになつた人であるからである。これから述べやうと云ふ話は、それらの手紙に綴られ

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

た事實を自分が書き直したものである。

道姉はある時、郡是製絲の女工として雇はれた。何故雇はれたかと云へは『自己の修行』のためだつたと道姉は云つてゐる。生計のためではなく女工生活そのものをしみ〴〵味つて見たかつたためなのだらう。道姉は郡是製絲ではたらいてゐるうちに少しも骨折しみなく働いた、それは眞に一燈園的氣持若しくは宣光社的氣持であつたのである。給料のためではない、自己の成就のためである。初めは慣れない仕事に苦しいと思ふことがあつたが慣れて來ると、仕事は少くも苦しくない、仕事をする喜びが却つて湧いて來るやうである。能率はあがる。そのうちに監督の社員に認められて昇給せられることになつた。その時道姉は昇給せられると云ふ理由がわからなかつた。

で、道姉は社員に云ふ——

『わたしは自分の修行のために仕事をさせて頂いてをります。はじめの内こそ仕事を苦しいとは思ひましたが、今は少くも仕事を苦しいとは思ひません。仕事が樂になつて却つて給料を餘計いたゞく理由はありません。それにまた現在の給料でわたしは生活に差支へは致しません。はたらいてゐるのは私一人で、一人が働いたゞけで母子二人が樂に生活いたしてをります。それ以上に給料を頂いてはなりません。』

晴惠さんは自分が昇給させられるのが實に自明の不合理だと云ふやうな調子で答へる。併し社員の方では、晴惠さんの答への方が餘程變梃子に聞えたに違ひない。晴惠さんの抗言は容れられなかつて道姉はつひに昇給されたのである。兎角するうちに社員は懶けもの〻女工をはげますために『谷口さんを見て御覽なさい。あんなに骨身をおしまずに働きなさる。貴女もあ

んなにして働きなさい』と云ふやうな言葉を事毎に用ひるやうになつた。昇給はことはる、骨身を惜まずに働らく、多くの女工は晴惠さんに到底も追隨してはたらくことは出來ない。つひに女工たちは晴惠さんを憎むやうになつた。

『何故？正しいことをするのが惡いのだらう。自分は他の友たちを愛してゐるのに、何故却つて憎まれねばならないのだらう。』

——かう晴惠さんは自分の正しい行爲から來た不合理な結果（近代の勞資問題に大なる暗示を與ふるものだと思ふ）をまざまざ見ながら考へさせられた。道姉はつひに郡是製絲會社を退いたのである。

晴惠さんは故郷の宍粟郡へ歸つて何か仕事をして生活することにした。その仕事が何であるかは道姉の手紙だけでは、推察が出來ない。併し彼女は一人眞面目にはたらくことによつて母子二人が生活することが出來たのだけは事實である。道姉は或る軍人の未亡人で年に百二十圓だけ恩給がはいるのだが、その金額が餘るのである。晴惠さんはそれを自分の贅澤につかはず、憐れな人や慈善事業にほどこすことにした。すると口善惡(くちさか)なき近隣の人々が、『彼女は人に賞められたいと思つてあんなことを偉さうにするのだよ』などと惡い批評をするやうになつた。晴惠さんはまた茲に躓いたのであつた。

その時であつた晴惠さんが『光』誌に於て拙稿『個人に於ける宣光社的はたらき』を讀まれたのは。晴惠さんは自己にまだ〳〵『宣光社的』な『融通無礙』のはたらきが缺乏してゐることに氣付いて、こゝにこそ、善なる行爲が惡なる實を結ぶ原因があることについて豁然としてさとる處があられたのである。晴惠さんは自分の論文が緣となつてこの覺りに到達し得たことを非常に悅ばれて自分に宛てゝの禮狀にその次第をこま〳〵と書きしるされた。

『僕よりも偉い人が僕に禮を云はれたよ。貧しいのが寂しくなつたら、晴惠さんのこの手紙讀むことだ。』

と、自分は家内を顧てみその時いつたのだつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

生死の托鉢（下）

住田無相

あまたの不幸な人々のために、彼は自ら知らずしてその苦に代り、そのにがき盃を受けたのではなからうか。内なるお光りと共なる彼は此の托鉢の命を受けて、此の世界に四十五年間の托鉢に出て來たのかもしれぬ。修羅か菩薩か、凡か聖か。

家一軒ない田圃中の道は暗く長かつた。そして雨はます〳〵降り頻り、風はいよ〳〵吹き募つた。雨水は棺から流れる。人夫は笠と簑を着、私と助役さんは途中で借りた傘をさして尻はしよりしてゐた。提灯はつけてもつけても消えるのでつけぬことにした。

漸やく燒場にいつた。燒場といふても名ばかりで、海の波打ち際に、野天にほんの炭をやく竈ほどのものが一つあるだけだ。薪をつみ、その上に棺をおいて、石油をかけ、マッチを擦りつけたが、餘り濡れたので容易に火がつかぬ。枯松葉を百姓家から貰つて來て、辛うじて燃しつけた。私は竈の前にかゞみ、合掌して、『Hさん、長い間の托鉢御苦勞さまでした。』とお禮を申した。

享年四十五歲。短いやうでもさて長いものである。

私達一旦發願して此の托鉢の生活に入つたものには、生きることも托鉢であれば、死ぬることも托鉢である。人生に苦のある限り、わたし達托鉢の生活者はその凡ゆる苦に堪え惱みを受けて生きて行くといふことも托鉢である。生あるものはすべて生を求め死を怖れる。人が死を怖れる限り、またわたし達托鉢の生活者は、その死の來れる時に、靜に亂れざる心を以て従

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF ILLINOIS AT
URBANA-CHAMPAIGN

容として死に往くことも亦托鉢ではなからうか。生死苦樂といふも、通じては托鉢の一心一行一相である。

濡れきつた棺の漸く乾きそめ、その一端に火の燃え移つたとき、私はそこを立つた。『修羅道に墮ちたか、解脱して佛果を證得したか』わたしは三度まさに燃え落ちなんとする棺に對つて言つて、そこを辭した。

宿へ戻つたが、烈しい風雨の音をきゝつゝ、困つてゐるであらう人夫のことを思ひ、燒かれつゝある彼のからだのことを思ふて、旅宿の一夜を睡り難く明した。翌朝は風も穩に、日も暖な好天氣であつた。賴んでおいたので朝最く人夫が迎へに來てくれた。

彼の體は朝の光りの前に、綺麗な白い骨と灰になつてゐた。私は竹箸をもつて一人彼の白骨を拾つた。——頭蓋骨、齒、からだ、手、足。

之れで、H——といふ一人の人の存在は此の世から何處かへ消え去つたのであらうか。

一人〳〵異れる運命を負ふて生まれ、それ〴〵の生活をなして、そして一生涯を終つて往く。生前には毀譽褒貶はまち〳〵であらう。されど、棺を覆ふて、靜にその一人の人物の生涯を憶念觀照すれば、その人はその人で有り難い托鉢をして下されたといふことが拜まれる。みな〳〵お光りより來りて、またお光りの故郷に還り往く、貴いお光りの子等はなからうか。

私は彼の遺骨を納めた箱を抱いて、直に大勢の近親の方々が持つて居られる東京へ向つた。

(大正十四年二月十三日記)

附記　此の一文の中には、常識的の說としてはやゝ過ぎた處もあるやうに思ふが、その點は注意してあやまたぬやう讀んでいたゞきたい。一と言へば、他にそれだけの間違ひ易さのあることを悲しむ。

○本號表紙題字は京都大原寂光院入口の石柱よりいたゞきました。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

光明へ

八田勝三

機會は早くなく遲くなくやつて來る。時機を失すると折角集つた人材も散つて了ふかも知れない。散るものは散るだけの祈りしか持ち合さなかつたのだ。斯う云ひ切つて了ふことは出來ない。何故なら此の生活は隨所隨所で歩み得るものであり、その人達は個々にでも自立出來る力を持つて居るのだから……。然し集中的祈りのより大いなる力を信ずればこそ、或程度までは仕事の始まるのを待つて居るのだ。でも欠伸が出る位待たされるとおしまひには自己丈けの道を開拓しやうと、寂しそうに後を振り返り乍ら去つてゆく。

×

所々に一つや二つ街灯が點つて居た所で明るいのはその附近だけである。現代の暗闇は餘りに深い。今は少さくともアーク灯が必要である。同人達よ！　光を分散しないやうにしやう。光の友よ！　一家の裡に光をとり入れると同時にアーク灯を點す祈りに參加して下さい。客觀的にも光化された社會を實現すべく總立ちにならねばならない時が來てゐる。

×

生活ぐるみ投げ出して居る同人達は何時でも勞力だけは提供出來る。それ〲にお仕事を御持ちになつて居る光の友には大體資本の方を受持つて頂く外仕方がないだらう。但しその財物はその方々の生活を脅やかすものであつてはならない。京都光の友會では、呉服やさんは反物の裁屑を、紙やさんは反古紙をといつたやうに、廢物から利用しやうとの提案がある。整理すれば家の中には色んな不用品もあるものだ。空瓶や古新聞を賣た代からでも一切のために捧げ得る。要は無理にならない方法でお光りに還した財物を、具體的の御相談を致すまで、貯金するなり、保管するなりしておいて頂き度い。勿論それが、保管中に必要が起れば、お光から

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF ILLINOIS AT URBANA-CHAMPAIGN

供養されたものとして使はれて好いわけだ。其時私達の財に對する扱ひ方と同じ心持を知つて下さることには役だつのだから。

×

何時も論議され乍ら纒つた雛型もなく今日に及んだ宣光社方面への祈願が、如何やら具體化せんとして居る。生れ出づる惱みに親も子も可成の試練を受けるだらうが、今は敢然として立たねばならない。斷じて行ふ所に光は輝やく。

×

大連ゆきの同人を送つて久し振りに神戸の埠頭にたつ。吼えるやうな汽笛と共に、ばいかる丸は後退し始めた。船上の客と埠頭の見送り人との手につながれた五彩のテープがするする〱と延びていつて、あつと思ふ間に切れて了つても、人影の分る間はそれらしい姿に何時までも別れを惜しんでゐる。おゝこれも人間の相なんだ。

『ぢや行つてらつしやい。左樣なら。』

船の出ない前に何等の未練もなく斯う云つて別れるのが悟つた人のとるべき態度でもなからう。別れに際しては泪ぐみ乍ら、帽子をあげ手巾をふつて別れを惜しむのが、人間としての至情だ。但し次の仕事に移つて了つても、別れに囚はれて何事も手につかないのは無礙ぢやないわけだ。其時其場のことに沒頭し得て、而かも次の瞬間には過去の事柄に煩はされない自分を常に持したいものである。

×

人間はめい〱自分自身に都合の好い美しい夢を作り上げて、それをこはそうまい〱と大事に抱き乍ら生きてゐるのだ。だが夢である限り何時かこはれる事があるかも知れない。その時、間誤つかないためには元々夢なのだといふことをはつきり思ひ起すことである。

×

道卽生活の生活に居乍ら、兎もすれば道だけを切り離して考えてゐる時が多い。道に叶へりや否やと思ふ事は、それだけ道に卽してゐないから起る結果であるのに……。

大正一五・三・一六

クリスト教社會主義史

松下吉衛著

代價卅二錢（郵稅共）

著者より――◇社會改革後に於ける謂ふ所の眞の人類史の第一頁も、もし各人の生活に靈的體驗の光耀がないなら、晴を點せざる畵龍と選ぶ所なからう。自己の生活が、今、檢討の對象たる資本主義制存續の因をなす事なきやを深く省察せんとせず、たゞ口頭に組織惡を論難攻擊して能事了れりとする社會運動家に吾等は與することが出來ない。◇現實の生活を離れて信仰なく、時代の苦惱に對する具體的解決策を度外視しての祈禱も奉仕も、閑人の骨董いぢりを去ること餘り遠くはあるまい。不勞所得に食んで死屍取扱人たるに甘んじ、日常生活資料の淨不淨すら點檢せんとせずして、徒らに本來不可說なる神を教壇に演述して慚ぢない宗教家は、僞りの尊嚴の外、何者なるか。◇或は右傾といひ、或は左傾といひ、又或は對內的には少しく左傾にして對外的には少しく右傾にといふ。いふものをしてその欲するがまゝにいはしめよ。それぐの見地に立つとき、すべて不可なからむか。たゞ、要は、よくそれが人性を明察し又社會組織進化の理法を正解し、あくまで生活の現實に即した運動なるにある。◇かくてクリスト教社會主義者の步みし道は、吾等に意味深い暗示であらねばならぬ。

東京市小石川區小日向臺町
文化學會出版部
振替東京七二八〇

購讀申込所
京都市烏丸頭小山下總町
回光社
振替大阪五九八三九

近代文化と一燈園

西田天香著　（代價三十錢）

内容――「お光り任せ」は消極でない、失業問題と一燈園、燈影小塾について、心の屑籠、外人の觀たる一燈園生活

一燈園生活問答

松下吉衛著　（代價十五錢）

内容――きわめて平易な問答體で、一燈園生活の眞生命、修行ぶり、在園者の日常生活、諸宗教との關係、進化論觀、社會運動觀等お述べたもの。附錄、道場淸規

購讀申込所

京都市烏丸頭下總町　回光社　振替大阪五九八三九、東京五七六七一

東京市小石川區小日向臺町　文化學會　振替東京七二八〇

一燈園經要

東京市本所區林町二ノ七八　同勞會

御希望の方わ實費・送料廿二錢（二錢切手）左記えお送りください。

●本誌創刊號第二號

目下再版準備中につき御希望の方わ此際回光社宛御申込くださいまし。

發行兼印刷人　京都市烏丸頭小山下總町五回光社内　西田保太郎
編輯人　東京市本所區林町二ノ七八同勞會内　松下吉衛